

新連載 4 発達検診のあり方を考える

比べて判断する発達検査のあり方

現代の発達検診は標準的な発達と比べることで判断をしています。例えば、3歳児が積み木を積むテストを受けて6個しか積まなければ、「お母さん、この子の暦年齢は3歳だけれども、発達年齢は2歳です。1歳程度のおくれです」といわれます。比べて発達を検診する方法には正常（定型発達）と異常（非定型発達）の規準はありません。大半の子どもができることを出来ない場合を「おくれ」と判断されます。

世界的に児童心理学で有名な教授が発達検診をした表を比べてみるとおもしろいことが分かります。子どもを見て何カ月で歩きます、何カ月で立ちました、何カ月で話し初めますかの発達検査をしてもらうと皆違うのです。ある人は30週でこうなった、ある人は、いや、28週だ、ある人は40週だと全部違います。

発達障がい児の兄がいる保育園に妹が入園してきました

5歳の発達障がいの子どもが保育園にいます。ゼロ歳から担当した先生も今なおおられます。2歳の妹が入園してきて担任は驚きました。2歳の妹は言葉も2歳児らしいしゃべり方でよく遊びますが、何か気に入らないことがあると保育室の隅っこに行き、タオルを吸っているのです。お兄ちゃんも2歳頃それをやっていたのです。

お兄ちゃんはどんどん発達障がいの兆候が強くなっている。早く妹に何かをしてあげなければ、妹も兄と同じ道筋を歩むと担任は悩んでいます。お母さんを無理やり説得して、総合病院の小児科で見てもらいましたが、何ともないといわれました。そのとおりです。きちんと受け答えをするのです。しかし、保育室では気に入らないことがあるとタオルを吸っているのです。

『経験豊かな保育者が心配する行動には、何らかの理由がある』

入園してきた妹の行動を一番先に気づいたのは担任の先生です。

私はこの考え方を強く支持します。ただ、保護者への伝え方のしんどさがあります。もう一つ、どこに発達の課題があってどのような支援が必要か、そういう保育者の目をうんと養うということ、そして保護者への伝え方をもっと私たちは学ばなければいけません。このままいくと、気になる子のほとんどは何の手だてもなく小学校に上がっていくのです。繰り返しますが、きょうの最大のテーマは、実はこれなのです。『経験豊かな保育者が心配する行動には、何らかの理由がある』のです。

発達障がい児に早く気がついてあげる遊びからの検査

初めて子どもを、初めての場所で、初めての臨床心理士が子どもの発達を検査するのはなくて、家庭や保育園の行動の中で、子どもが環境との関係で表れた行動をから、発達を判断するという考えが出てきました。

発達障がいは、その子自身の発達に問題があるのではないか、その子自身の脳が欠損しているのではないか、と一般の人は考えます。発達障がいはそうではありません。脳の神経系統の何兆という絡み合いのどこかがうまく疎通しないと考えられています。光に弱い子、匂いにこだわる子、ひたすら動いているだけの子の脳の働き方に問題を生じているのです。